

# ホセ・マルティの見た米墨関係 —1881～1886—

## Jose Marti's View on Mexico-U.S. Relations: 1881-1886

松枝 愛

MATSUEDA Megumi

東京外国語大学大学院博士後期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

### キーワード

ホセ・マルティ メキシコ 国際関係 19世紀

### Keywords

Jose Marti; Mexico; International relations; 19th Century

原稿受理日：2022.1.9.

*Quadrante*, No.24 (2022), pp.323-339.

### 目次

序

1. 金ピカ時代下に芽生えたマルティの疑心
2. 米墨通商条約に見た米国の欺瞞
3. カッティング事件に関する米墨両政府対応への  
評価と与党批判

結び

### 序

本稿では、19世紀後半に詩人、ジャーナリストとして主に米国ニューヨーク(以下NY)からイスマノアメリカ<sup>1</sup>諸国の主要紙に寄稿していたキューバ人のホセ・マルティ(José Julián Martí, 1853～1895)から見た米墨関係を分析する。

ホセ・マルティは、スペイン植民地からキューバを独立させるべく、第二次独立戦争(1895～1898年)を率いた「キューバの使徒(el Apóstol)」として、同国では英雄として位置づけられている。また、シモン・ボリーバルやサン・マルティンの思想を汲んで、イスマノアメリ

カの団結を呼びかけた人物として、ラテンアメリカのみならず、世界的にも偉人として知られ、ラテンアメリカにおけるモデルニズモの先駆者のひとりとしても名高い。米国NY市の6番街は、別の名を「南北アメリカ通り(Avenue of the Americas)」というが、ボリーバル、マルティンはじめ、メキシコ元大統領ベニート・フアレスなどラテンアメリカ諸国の英雄たちとともに、ホセ・マルティ像も建立されている。

その一方で、現在に至るまで、マルティの評価は政治に大きく左右されてきたとも言える。マルティは祖国キューバの独立を見ることなく、彼自身が主導した第二次独立戦争が始まって間もない1895年5月に戦場でスペイン軍の弾丸を受け、その生涯を終えた。その後のキューバは、1898年からの米西戦争を経て、米国の保護下に1902年に独立した。喫緊の課題となったキューバのナショナリズム形成の過程で、マルティは、英雄の1人に名を連ねた。その存在は20世紀の第一四半期から第二四半期にかけて神聖化され、1959年のキューバ革

<sup>1</sup> 本稿の「イスマノアメリカ」の呼称は、米州(南北アメリカ及びカリブ海)の旧スペイン植民地を指す。



命に至って、革命の思想的支柱として、フィデル・カストロによって偶像化されていった。ところが、米国マイアミを中心に、反体制派キューバ人にとっても、自由を希求した戦士として、マルティは、英雄であり続けている。思想対立する両者の間で、マルティの取り合いが起きているというのである。

この対立構造については別稿に譲るとして、ホセ・マルティの存在が、思想的対立を深めながらそれぞれに肥大化・偶像化する状況において、ホセ・マルティの一次資料に基づいて、彼の主張を明らかにし、等身大のホセ・マルティを浮かび上がらせることが、特に歴史学の立場から求められているのではないかと考える。

日本におけるホセ・マルティに関しては、1965年に神代修の先駆的な紹介があり(神代 1965)、キューバ人研究者エルミニオ・アルメンドロス(Armendros 1965)による概説書が1998年に邦訳された。その後1998年から2005年にかけて、マルティの重要テキストを編纂した3巻本の『ホセ・マルティ選集』が出ており、柳原(2007)が文学研究の立場から優れた分析を示しているが、歴史学から見た伝記的研究は未だない。

他方、世界的に見ると膨大な研究蓄積がある。特にキューバでは、1977年に国立の「ホセ・マルティ研究所(Centro de Estudios Martianos: 以下 CEM)」がロベルト・フェルナンデス・レタマール<sup>2</sup>を初代所長に迎えて開所して以来、マルティの生誕記念日(1月28日)と命日(5月19日)前後には、追悼を兼ねた学会が毎年開かれているほか、最新のマルティ研究動向が年報“Anuario del Centro de Estudios Martianos (ホセ・マルティ研究所年報)”で発表されている。また、同研究所が編纂したホセ・マルティ全集は、1963～1967

年の初刊から3回改訂を重ねている。筆者は2021年5月に開かれた国際学会 COLOQUIO INTERNACIONAL ESTADOS UNIDOS EN LA PÚPILA DE JOSÉ MARTÍ(国際コロキウム—米国:ホセ・マルティの視点から)にオンライン参加して、最新研究の現状の一端をうかがい知ることができたが、バスケス・ペレスの概説書(Vázquez 2016)でキューバでの研究の進捗状況をおおまかに把握することができる。

そしてまた米国においても、キューバ系米国人研究者を中心に研究が盛んである。今世紀に入ってから、マルティ研究の思想的な偏りを疑問視する研究者たちが新たな流れを作っており、比較文学研究が専門のアルフレド・ロペスは、「こんにちまでの多くのマルティ研究に見られる狭量で思想的にも偏狭なマルティ像を超えて、理論的な分析と客観的かつ批判的な立場に基づいたマルティ像を描くことが必要である」と述べている(López, A. 2006: XIII)。ホセ・マルティ研究の中でも、本論で取り扱う米国滞在期はとりわけ分析が盛んであり、後年マルティを英雄たらしめた主たる功績が米国滞在中にあったというのが通説となっている(Martí 2003: XV, López, A. 2014: XII)。これらの蓄積と研究傾向を参照しつつ、米国におけるマルティの活動に注目したいと考える。

ホセ・マルティは数多くのテクストを残しており、CEM がまとめた全集の批判校訂版は全28巻に及ぶ。マルティの文体は概して詩的で、解釈の余地が幾通りにも可能な場合があり、新聞などの公的な言論メディアと私的な書簡とでは、意見の矛盾が見られたりする。しかし、奴隷制反対とイスマノアメリカ諸国の団結という主張は一貫している。こうしたマルティの思想が後世のラテンアメリカ諸国の文化・思想形成に貢献した最も代表的な論考が、1891年に発表された、『我らのアメリカ(Nuestra

<sup>2</sup> Roberto Fernández Retamar (1930～2019)。キューバの詩人、評論家。革命キューバの文化を支えた中心的知識人。

América)』である。

『我らのアメリカ』は、柳原(2007)の分析にあるように、イスマノアメリカ外部(欧州及び米国)の無知(蔑み)とイスマノアメリカ内部の無知の双方を糾弾する内容であり、この両面批判こそが、マルティの政治的嗅覚の鋭さの証左である。論考後半には、米国を隠喩する「隣人(vecino)」の帝国主義的性格に改めて危機感を表明しており、マルティがボリーバル、サン・マルティンと並ぶ「ラテンアメリカの解放者」、「第三世界の先覚者」と位置付けられるゆえんとなっている(Armendros 1965=1996: 201-204)。またそれは、19世紀半ば以降、経済的繁栄を謳歌するNYを基盤にして、マルティ自身の表現を借りれば、米国という「怪物の内臓に入って」<sup>3</sup>、政治、経済、社会、文化といったあらゆる面をつぶさに観察する過程で、確信に至った見解であろう。

マルティが抱いた米国とイスマノアメリカ双方への危機感は、どのように形成されていったのだろうか。米国滞在期のマルティのテキスト分析は盛んに行われており、E. Foner(1977)がラテンアメリカを扱った主要テキストを集めて解説しているが、記事ごとの分析にとどまり、複数のテキストを横断したマルティのラテンアメリカ観は提示していない。また、Schookai(2007)も主要テキストを英訳して編纂しているが、あくまで翻訳に留まっている。マルティが、どのような経緯を辿って、『我らのアメリカ』論文に至るイスマノアメリカ観を醸成していったのか。ただ、彼の記事の一本を取ってみても話題が多岐に亘るゆえに、マルティが扱った膨大なテーマを網羅してその結論を導くことは困難

に等しい。

そこで本論では、ホセ・マルティが見た米墨関係に焦点を絞った。メキシコは、イスマノアメリカに置かれていた2つのスペイン副王領のうちの1つヌエバ・エスパーニャだった重要国であり、地政学的にも、1821年にスペインから独立した時点では、アルタ・カリフォルニアと呼ばれた北緯42度線以南の太平洋岸からメキシコ湾南のユカタン半島最東端まで広大な領土を有する大国だった。だが米国と国境と接する因縁ゆえに、独立以前から国家形成過程期にも多大な影響を米国から受けた。また、マルティにとってメキシコは、キューバから追放されてヨーロッパでの亡命生活後に再び戻った米州地域の国であり<sup>4</sup>、文筆家として身を立てた地でもある。その後、独立間もないイスマノアメリカ諸国を転々としながら、国家形成に携わる重要人物たちと関わりあうことになるのだが、イスマノアメリカを姉妹諸国と考える思想の起点となったのがメキシコである。Retamar(1992)によると、マルティがグランデ川<sup>5</sup>の南からパタゴニアまでを「我らのアメリカ」と表現し、「ほかのアメリカ(Otra América)」、つまりアングロサクソンのアメリカを、異なるアメリカとして対比させるようになったのも、メキシコ滞在中からである。そこで出会った生涯の親友マヌエル・メルカード<sup>6</sup>と交わした書簡からは、メキシコを愛し、メキシコ情勢を常に気にかけていたことが窺える(後藤: 321, Martí 1975(2): 34)。メキシコについての言及は、彼の米州関係全体の考え方がよく表れているのではないかと期待される。

マルティの文章が枠に捉われず経験主義的

<sup>3</sup> 1895年、マルティが親友マヌエル・メルカードに宛てた最後の手紙の一節。

<sup>4</sup> ハバナにいた家族もメキシコに渡り、家族とともに首都メキシコ市に1875~1877年まで暮らした。

<sup>5</sup> 米国とメキシコの間を流れる国境河川は、米国ではグランデ川(Rio Grande)、メキシコではブラボー川(Rio Bravo)と呼ばれるが、本稿ではマルティが「グランデ川」の呼称を使用していたのに準ずることとする。

<sup>6</sup> Manuel Antonio Mercado de la Paz(1838~1909)。法律家。マルティが家族を訪ねて渡墨した1875年以後の親友で、米国からのマルティの新聞書簡をメキシコで受け取っていたのもこの人物だった。マルティが銃弾に斃れる寸前にも手紙を認めていた相手。

かつ多面的な視点を持ち始めたのは、1881年以降の米国発の記事からだと言われている(Pérez H. 1990: 2101)。本稿では、米国滞在期の記事が時系列にまとめられた *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892* を底本に<sup>7</sup>、マルティの滞在前期にあたる、ガーフィールド大統領暗殺(1881年)から、米墨国境で起こったカッティング事件(1886年)までを主な調査対象に、マルティの米墨関係に関する思索を辿り、米国とイスマノアメリカ諸国内部の無知を糾弾するに至った過程を探る。反米姿勢がより鮮明になった滞在後期(1887～1892年)の考察は別稿でまとめたい。

### 1. 金ピカ時代下に芽生えたマルティの疑心

ホセ・マルティが二度目のヨーロッパ滞在经过してNYに到着したのは1880年1月だが、その後間もなくベネズエラに半年間滞在したこともあり、NYに定着し、執筆活動を本格的に始めたのは、1881年8月からであった。

当時の米国は、作家マーク・トゥウェインが1873年にチャールズ・ダドレー・ワーナーと発表した作品のタイトル「金ピカ時代(Gilded Age)」に象徴される。巷では栄華が装われているが、実のところ単なる金メッキが表面を覆っているだけで、メッキを剥がせば腐敗に塗れているという米国社会への痛烈な皮肉が込められた表現である。1865年の南北戦争終結以降、国内情勢が安定した米国には移民が押し寄せ、その数は飛躍的に増加した。経済の中心地NYは特に流入が激しく、船舶でやってきた移民の受入口となっていたエリス島を通過した外国移民のみならず、国内の農村部からも仕事を求める人々が都市に流入する傾向が見られた。1871年の同市の人口は約147万8,000人で、ロンドン、パリに続く世界第3位を

誇る大都市に急成長した。そして、移民の労働力を原動力に、国内で近代化、資本化が一気に加速したのがこの頃である。東西海岸を結ぶ電信線開通(1861年)、大陸横断鉄道開通(1869年)、電球発明(1879年)、ブルックリン橋(1883年)や自由の女神像(1886年)などが完成している。マルティは、ブルックリン橋や自由の女神像の建立の目撃者となり、前者に関してはその目覚ましい発展ぶりを地元NYの *La América* 誌(1883年6月号)に綴っており(269-275)、柳原(2004: 149-151)や竹村(2016: 88-91)の同記事の分析にあるように、マルティが抱いた米国の科学技術力への憧憬ぶりがわかる。後者に関しては、フランス政府の寄贈の経緯から都度語られているが、「自由」を軸とする米仏関係に焦点をあてた記事が多い(413, 760-763)。

マルティは、鋼鉄業や鉄道業、金融業、輸送業などが急成長し、巨万の富が築かれ、人々の生活が科学技術の進展の恩恵を受けて変わっていく米国社会を眺める一方で、政財界に蔓延る腐敗構造に厳しい目を向けるようになっていった。政界では共和党と民主党の二大政党制が定着していく中で、資本家と政治家が結びついたロビーイングが盛んになり、巨大資本の利益いかんで政治的決定が下される構造が作られていた。マルティの思想変遷を辿ったPérez H.によると、マルティは1883年にはすでに、以下を米政治の問題点として挙げている。1) 政治家と大資本家の関係、2) 職業政治家と公務員の関係、3) [資本家による] 国家財政の略奪、4) 反民主主義的な選挙メカニズム、5) 腐敗した政治家と大企業家の帝国主義的傾向(Pérez, H, 1990: 2102)。ほかにも米国の政治腐敗に関するマルティの言論は竹村(2016: 95-101)で詳細に分析されている

<sup>7</sup> この先この底本からのマルティの記事の引用は、引用の後にページ数のみを示す。同じページからの引用が続く場合、最後の引用にのみページ数を付した。[ ]内は、執筆者の補足的な説明である。

が、マルティがイスマノアメリカとの関係を揺るがす腐敗政治家と考えていた政界の大物に、南北戦争の北軍の将軍で共和党から第18代米国大統領となったユリシーズ・グラント<sup>8</sup>と、ガーフィールド政権(1881年)及びハリソン政権(1889～1893年)で国務長官を務めた同じく共和党の大物議員ジェームズ・ブレイン<sup>9</sup>を挙げたい。

まずグラントに関してマルティは、「メキシコとの経済関係を広げようとする金持ち権力者」(14)と捉えたとともに、与党共和党の政治腐敗が顕著になったのがグラント政権下だと考えており、共和党の保護主義政策と政治腐敗に強い因果関係を感じていた。1883年2月25日<sup>10</sup>付のアルゼンチン紙 *La Nación* への寄稿「マルティからの手紙」では、米墨通商条約に関するマルティの懸念が示されているが、同条約は、外交官として長年ワシントンDCで米墨関係の構築にあたってきたマティアス・ロメーロ<sup>11</sup>が、グラント元大統領と鉄道利権を有利にするために進めているものと非難する(231)。一方、マルティは1885年7月のグラントの死後、数回にわたり回顧録を発表している。特に1885年8月12日付の *La Nación* 紙に宛てた長編「グラント将軍」は、貧しい家庭に生まれたグラントが、南北戦争の北軍の将軍になるまでの栄誉が前半で描かれ、後半は政治家に転身後に彼が行った政策が批判的な論調でまとめられている(506-528)。同記事を詳細に分析したDíaz(1997)によると、「マルティは、記事「グラント将軍」を執筆中、常にキュー

バとメキシコに思いを巡らせ、〈自らの愛国心の痛みを文章に込めた〉と語っている。キューバ独立戦争の同志マクシモ・ゴメスとアントニオ・マセオの武装計画<sup>12</sup>を拒否して両将軍と袂を分かった背景には、グラントに関する思索が関係している」(Díaz 1997: 2131-2132)。グラントという南北戦争の英雄がその後政界において汚職に塗れた経緯を、Díazが挙げたキューバに関する2人に加えて、時のメキシコ大統領ポルフィリオ・ディアス将軍にも重ねていたのだろう。

次に、ブレインに関してマルティは、寄稿を始めた1881年から、共和党内の派閥争いをめぐる彼の強欲さに言及している(9, 36)。ブレインはガーフィールド政権下で国務長官となると、貿易や鉄道建設の互惠条約に基づくイスマノアメリカ諸国との関係強化をはかり、米州諸国を招いて自らを議長とする国際会議を企画するなどした。しかしガーフィールド暗殺で政敵アーサー副大統領が政権につくと、ブレインは国務長官の職を辞し、会議もキャンセルされた。しかしその後も政財界に呼びかけイスマノアメリカ諸国との関係強化を模索し続け、1889年に第1回ワシントン国際会議開催<sup>13</sup>にこぎつけた。マルティは、政治家ブレインの領土拡張主義を早くから嗅ぎ取り、この人物を警戒していた。

グラントとブレインが所属していた共和党は、1854年に北部の産業資本家を基盤として奴隷制廃止を旗印に結党した。1860年の大統領選で同党の公認候補エイブラハム・リン

<sup>8</sup> Ulysses Simpson Grant (1822～1885)。

<sup>9</sup> James Gillespie Blaine (1830～1893)。

<sup>10</sup> 記事の日付は、新聞、雑誌への掲載日ではなく、マルティが執筆した日付とする。本稿末の一次資料リストの日付も同様とする。

<sup>11</sup> Matías Romero Avendaño (1837～1898)。

<sup>12</sup> 2人の将軍は、あくまで軍人主導の武装闘争、独立達成を目指し、軍事独裁を否定しなかった。

<sup>13</sup> The First International Conference of the American States は、Pan-American Conference (汎米会議)とも言われる。1948年にボゴタで開かれた第9回会議で米州機構 (Organization of American States) の設立が採択され、これに引き継がれた(ボゴタ憲章)。

カーンが選出されて以来、南北戦争を経て、20世紀初頭のウィルソン政権まで共和党の優位が続くが、その間、唯一民主党による政権が2期のみあった。グローバー・クリーヴランド政権の第1期(1885~1889年)、第2期(1893~1897年)である。1884年11月に行われた大統領選挙においてクリーヴランドの対抗馬、共和党の指名候補者はブレインだったが、汚職疑惑を追及されて十分な支持を得るに至らなかった。ブレインを警戒してきたマルティだが、次期政権が民主党に決まり、政権交代が待たれる1885年1月の彼の筆致には民主党への警戒感が感じられる。

「今は冬真っ盛りである。でも、心配と驚きが増してその実感が無い。置き土産を残してアーサーは政権を去っていく。そんなものは引き継ぎたくなかったとばかりに、民主党員は驚き落胆した。その土産とは、重要法案といった類ではなく、米国にとって内戦以降、最も重要な変化を示唆するものであった。つまり、通商条約と共に米国が北米<sup>14</sup>および近隣の諸島国を平和裡かつ決定的に占領するというシステムで、すでに準備段階にきている。距離の近さゆえにより深刻なのを理解しなければならない。これは、共和国家の緩みと明らかな野望を併せ持った新たな手段以外の何者でもない。これはグラントが手段を得ないままにずる賢く夢見た陰謀だ。でもグラントは不運のために叶わず、ブレインによって大きく進展するところであった。非倫理的な支援と引き換えに、もしもイスマノアメリカの国で帯状の領土の割譲を申し出る国家があったとしたら、北からすでに脅迫されているある国家が南からも抑圧される

ことになる。もう一つの恥知らずの権威者フランスを追い出した見返りに、ブレインの計画に手足を拘束されて、北が守ると言う名のもとにイスマノアメリカは無条件の支援を要請することになる」(423-424)。

ここで言われている「ある国家」とは、メキシコを指している。太平洋と大西洋をつなぐ交通路として中米の地峡に目を付けた米国が地峡を手に入れたら、中米はおろかメキシコも再び領土を奪われるのではないかと危惧しているのだ。

ブレインにこそイスマノアメリカ諸国を力で支配しようとする態度を見てとっていたマルティだが、共和党が素地を作ってきた対イスマノアメリカ政策の拡張主義を民主党政権が引き継ぐ懸念がうかがえる。

伝統的に、共和党は奴隷制廃止、人種平等、中央集権制を好む一方、民主党は州権限の拡大、自由貿易主義で、経済活動への中央政府の権限を制限する傾向にあった。しかし、南北戦争後、共和党主導で社会改革の理想を追求した再建期の終盤には既に両党の政策に顕著な差はなくなり、1870年代後半になると民主党も北部の経済利害を優先するなど政策面が似通ってきたと言われる(貴堂 2019: 154; Martín 2003: 1825)。巨大化した企業は利権を守るために政治家にロビーイングを行い、利権が政策を左右した。政財界の癒着である。マルティの言う「民主党員は驚き落胆した」とは、癒着に塗れた通商政策を引き継ぐ重荷を表すのだろう。しかし、そこに敷かれたレールを進めば、民主党の基盤である南部の大農園や開拓者にとって好都合な、領土拡大を可能にする。マルティは、状況を理解するのに歴史的経緯に目を向けるのを怠らない。かつて民

<sup>14</sup> 原文は“la ocupación pacífica y decisiva de la América del Norte e islas adyacentes por los Estados Unidos”で、la América del Norteとは北米大陸、つまりパナマ地峡より北を指すと思われる。

主党からジェイムズ・ポーク<sup>15</sup>が指名候補に選ばれ、テキサス併合とオレゴン獲得を公約し大統領選に勝利したのが1844年。それから1年足らずでテキサスは米国に併合され、米墨戦争が勃発し、メキシコは国土のほぼ半分を失った。ポークを「欲に駆られてメキシコに対して戦争を起こした南の男」(165)ととらえるマルティが、民主党の復権にメキシコが舐めた辛酸を重ね合わせたとしてもおかしくない。帯状の領土とは、かつてフランス干渉戦争時に苦境に追いやられたベニート・フアレス大統領が、マティアス・ロメーロを派遣して米国に支援を求めた際にテワンテペック地峡の権利を差し出した過去を想起させる。結局当時は米国議会で否決されたが、20年を経て、ニカラグアの運河建設について、運河地域の両端を米国が管轄するというニカラグアとの合意が再び上院にかけられていた。イスマノアメリカの未来が新大統領の判断いかんにあるとマルティは認識していた。マルティが同記事内を締めくくる一節にも、その思いは明確に表れている。「アメリカ諸国全体の重大さに関わる大きな歴史的な変化の中に米国はある」(426)。

民主党の基盤は南部プランターで、南部の州知事、州議会選挙では民主党が圧倒的に強かったが、クリーヴランドは、大統領就任前までNY知事を務めていたこともあり、南部の民主党地盤からは距離を取り、東部実業界寄りであった。民主党主導のNY州政府にも同様の政財界の癒着問題を感じていたマルティは、1870年代以降顕著になった政治腐敗に楔を打つのが望まれた1884年の大統領選挙であっても、「経済は、両党とも同じように優柔不

断だ」、「生産者も労働者も、共和党员だったり民主党員だったりする。公共のための大義や献身といった面では民主党が優れているが、民主党員の多くはコックス<sup>16</sup>のような金持ちや、ヒューイト<sup>17</sup>のように大きな製造業を営む人物たちだ」(455)と認識しているように、政権交代で警戒を緩めることはない。その点Pérez H.は、クリーヴランド政権誕生をマルティは楽観視していたと述べているが(Pérez. H, 1990: 2103-2104)、対イスマノアメリカ関係の変化の兆しをマルティが政権交代を機に厳しい目で見ていた点は留意すべきだろう。

クリーヴランドは勝敗を占う要だったNY州でわずか1,000票差でブレインに競り勝ったことで大統領選の勝利を手中に収め、1885年3月4日に就任した。3月13日にマルティは就任式の様子を*La Nación*紙に伝えているが、イスマノアメリカとの関係を次のように予想している。

「自浄作用と自由投票の増加によって、権力が太陽からもうひとつの太陽の手に渡ったことで、米国の政策が急進的な方向に変わりつつある。おそらくアメリカ大陸<sup>18</sup>もだ。何という体たらくか、イスマノアメリカの中には、米国の与党政治家や有力者の誘いに乗るか、乗るそぶりをみせている国がある。しかしバッファローの上品な弁護士<sup>19</sup>は異なる考えを持っていて、外に向かうよりも、内なる誠実さを願い、自由を掲げて人が他人の自由を侵害しながら隣人の大地に入っていくのを想定できずにいる。横柄さを抛り所にする繁栄がすでに

<sup>15</sup> James Knox Polk (1795~1849)。第11代米国大統領。

<sup>16</sup> Samuel S. Cox (1824~1889)。南北戦争以前から民主党議員としてオハイオ州やNY州で活動した。クリーヴランド政権後期に民主党党员集会の議長を務めた。

<sup>17</sup> Abram Hewitt (1822~1903)。鉄鋼業を営み、民主党議員として議会に参加。クリーヴランド政権誕生時は下院議員だった。1887年から2年間NY市長を務めた。

<sup>18</sup> 原文は la América。

<sup>19</sup> クリーヴランドのことを指していると思われる。

臙げに見えるのに」(442)。

このようにマルティは、新大統領の考えとは裏腹に、政権交代を米国がイスパノアメリカに食指を伸ばす契機と捉える向きがあると指摘する。あえて付言すれば、1889年のマルティの論考には、「ルイジアナの買収を手始めに、ジェファーソン大統領のもと、征服政策を進めたのは、まぎれもなく民主党であった」(1339-1340)という一節があるが、これはマルティが歴史的考察から民主党に対して常に抱いていたイメージだったのではなからうか。

## 2. 米墨通商条約に見た米国の欺瞞

1883年2月25日付の*La Nación* 紙への記事「マルティからの手紙」は、同紙への4通目の寄稿にあたり<sup>20</sup>、米墨通商条約についてのマルティの意見表明となっている。

米墨通商条約は、二国間の経済関係が深まる中で必然的にその必要性が議論されるようになった。1870年代後半から1880年代にかけて、メキシコの鉄道建設業と鉱山業への投資が飛躍的に増加すると、米国の膨張政策への不安は払拭されないままに、二国間の貿易関係は新たな局面に入った。1882年初頭、チェスター・アーサー政権(1881~1885年)が提案したメキシコとの互惠条約の交渉開始が上院で承認された。メキシコのマヌエル・ゴンサレス大統領<sup>21</sup>は同年、全権大使に経験豊富なマティアス・ロメーロを指名して、米国との交渉

任務にあたらせた。米国側の交渉役はグラント元大統領とトレスコット元国務長官という顔ぶれだった<sup>22</sup>。この年両政府代表間で話し合いが重ねられた。1882年12月、メキシコ外務省は互惠条約案に合意した。両国は、1883年1月、条約調印に至る。マルティの記事はこれを受けて書かれたものである。

圧倒的な力の差が存在する両国間の通商条約は、メキシコ国内の産業発展を妨げかねないというのがマルティの主張である。確かに、免税対象となるメキシコ産品が29項目なのに比べ、米国産品は73項目と、数だけでもその差は明らかだ(Márquez 2019: 66)。産業が発達した米国の輸出能力に比べてメキシコはまだ不十分で、マルティはかつての日米修好通商条約の不条理を例に出して、同様の不平等な協定だと訴える。米国内で余剰となったあらゆる機械や工業製品がメキシコに入ってくれば、メキシコの未熟な国内産業が育たない。メキシコから輸出されるのは、皮革製品や材木、砂糖、竜舌蘭、フルーツ、コーヒーなどの農産品が主で、大規模な産業が育っていない状態では、貿易額には限りがある、と論ずる(231-236)。

マルティは、高関税の恩恵を受ける米国の保護主義者の主張として、無関税の農産物の流入による、国内価格の下落を危惧する砂糖生産者に触れる。そしてウィリアム・マックスウェル・エヴァート<sup>23</sup>の舌鋒ぶり、保護主義者の先頭に立つピーター・クーパー<sup>24</sup>、ウィリアム・ドッ

<sup>20</sup> この頃マルティは、来米間もないアルゼンチン人の実業家カルロス・カランサと出会った縁で、アルゼンチン領事も兼務するカランサの事務所まで職を得て生活基盤ができた。前年カランサがブエノスアイレスに赴いた際に、元大統領でラ・ナシオン紙の創設者であるバルトロメ・ミトレと会見した折、マルティを紹介し、同紙への寄稿が始まった。米国滞在中にマルティが寄稿した記事は同紙宛が圧倒的に多く、6割強を占める。ちなみにこの記事の最後には、「我らのアメリカをこんなにも愛す人間がほかにもいるだろうか! (¡Quien ama así la nuestra América!）」とカランサを称賛している。

<sup>21</sup> Manuel González Flores (1832~1893)。メキシコの軍人。ポルフィリオ・ディアスの片腕となりながら、1880~1884年にメキシコ大統領を務めた。

<sup>22</sup> このため「グラント-トレスコット条約(Grant-Trescott Treaty)」とも呼ばれる。

<sup>23</sup> William Maxwell Everts (1818~1901)。共和党の重鎮、ジョンソン政権で司法長官を務め、1885~1891年にNY代表の連邦上院議員を務める。

<sup>24</sup> Peter Cooper (1791~1883)。NY出身の発明家、政治家。米国初の蒸気機関車を設計した。1883年4月の死去寸前まで政治的影響力があつたことがマルティの筆致から窺える。

チ<sup>25</sup>ら主要人物の立場を説明する。Pérez H. が指摘するように、巨大企業を保護するために米国政府が設定する高関税が、国内の需要を上回る余剰生産を生み、国際競争力の欠如、失業、貧困、社会不安といった国内問題を引き起こしていると考えるマルティは、そのツケをメキシコに払わせようとするこの通商条約の健全性に疑いの目を向ける (Pérez, H.: 2103)。

条約の批准は難航した<sup>26</sup>。米国上院の特別国会が1883年2月に閉会したため、批准のための採決は1884年1月18日まで先延ばしとなった。そして行われた採決は賛成39票、反対20票で、可決に必要な3分の2に至らなかったために、再度先送りされた。3月11日の再議決では、交渉開始の許可が両院から出されたという理由で、下院による承認も必要という条件付きで可決された。下院での審議、採決が行われる前の、5月20日までにメキシコの国会が批准しなければならなかった。期限直前の5月14日に同国会で批准され、あとは米国下院の決定を待つだけとなった。しかし1884年半ばまでに、米国はキューバとプエルトリコに関してスペイン政府と、また西インド諸島に関して英国政府と、さらにドミニカ共和国とも交渉を進めていた。とりもなおさず、この頃すでに次期大統領選が始まっており、関税同盟推進のブレインと、それに懐疑的なクリーヴランドという対立構造が示されつつあった。1885年1月15日付の *La Nación* 紙の「マルティからの手紙」では、ニカラグアの運河建設をめぐる領有権、キューバとプエルトリコに関する米西間での通商協定の取り決めなど、一連の不平等条約に「メキシコも連なっている」(424)と、先

の通商条約に関する懸念を引き続き表明した。

その後、米国の政権交代によってこの二国間通商条約は暗礁に乗り上げたものの、関税貿易をめぐる議論はくすぶり続けた。

### 3. カッティング事件に関する米墨両政府対応への評価と与党批判

在米6年目となる1886年5月から、マルティは、メキシコの *El Partido Liberal* (『自由党新聞』、以下 *EPL*) 紙<sup>27</sup>に寄稿を始めた。当時のメキシコは、南北戦争を終えて手を差し伸べてきた米国に引っ張られる形で、近代化に向かってひた走っていった。時の絶対権力者は、ポルフィリオ・ディアスである。スペインやフランスの干渉や寡頭勢力間の争いで内政不安が続いた混乱期に軍人として名声を築いたディアスは、1876年に軍事クーデターを起こし権力を握ると、忠実な部下であるマヌエル・ゴンサレスに政権を委ねた期間(1880～1884年)を除き、1911年まで大統領選挙で再選を重ねて長期独裁政を布いた。「秩序・平和・進歩」を掲げて、政情安定と経済成長がメキシコにもたらされた時期であったが(大垣2008: 84)、マルティにとってディアスはベニート・フアレス派のレルド・デ・テハーダ政権を打倒した民主主義の破壊者であり、軍事独裁者だった。

ディアス政権下のメキシコとクリーヴランド政権2年目の米国の関係は、概ね良好だったが、火種はあった。特にグランデ川の国境付近では、かつてテキサスを併合したようにメキシコ北部を米国の支配下に置こうとする勢力が、軍事侵攻の機会を狙っていた。

1886年8月、米墨国境のメキシコ側にある

<sup>25</sup> William Earl Dodge (1805～1883)。鉄道、保険、材木、炭鉱、鉄鉱業に投資した米国実業界の実力者。1866年に共和党代表に選ばれ、NY 商工会議所長を3期連続で務めた。彼が共同経営に携わった Dodge & Company は1世紀にわたり米国随一の鉱山会社として知られた。

<sup>26</sup> 条約批准にむけた両国の動きは Marquéz (2019) pp.69-77 に詳しい。

<sup>27</sup> 同紙についての時代的位置付けは柳原 (2004: 178-179) が参考になる。

チワワ州エルパソ・デルノルテ<sup>28</sup>でカッティング事件が起こった<sup>29</sup>。あわや第二次米墨戦争勃発かと国際的緊張が走ったこの事件をめぐるマルティは3週間にわたり、論評を展開した。

カッティング事件は、米国人の記者A・K・カッティングが、1886年6月22日にメキシコ当局によって逮捕・収監されたことに端を発する。逮捕に至った背景はこうである。メキシコ人のエミグディオ・メディーナという人物がメキシコ側でカッティングのライバル紙となる新聞を発行し、これに憤怒したカッティングが、メディーナを紙上で中傷、メディーナはこれに対し記事の撤回を裁判所に提訴した。判事は訴えを認め、カッティングも一旦は謝罪記事の掲載命令に従った。しかし米国側のエルパソの街で英語とスペイン語によるメディーナへの攻撃を紙上で新たに展開し、自ら国境を渡りそれをエルパソ・デルノルテで頒布した。メキシコ刑法86条は、メキシコ国外で起きたメキシコ人に対する犯罪に対しても外国人を罪に問うことができたため、メキシコ人を誹謗する記事を印刷したかどでカッティングは身柄を拘束された。これにとどまらず、カッティングはメキシコ国内での新聞頒布による、判事との取り決めの遵守違反、そして名誉毀損の罪にも問われた。

すると橋一本を隔てたエルパソの住民がカッティングの即時解放を求めて声を上げ、テキサス州政府に陳情した。同州知事は氣勢を揚げて戦争を煽り、一時は一触即発の事態にまで発展した。ついには連邦議会下院でカッティング事件への対応が協議されるに至る。歴史的視野を持つマルティは<sup>30</sup>、事件のからくりを見抜き、終始警戒を緩めなかった。

一連の事件に関するマルティの言論から読み取れるのは、戦意を煽る米国の報道ぶりや国境の緊迫状況を冷静に分析しつつ、メキシコを守りぬく覚悟であるような、一貫した米国批判の姿勢である。ただし、バヤード國務長官の暴走と、連邦議会、政権党、州が利己的な行動に走る政治腐敗に落胆しつつも、外交レベルで沈着化を試みるクリーヴランド政権の対応を評価しており、この件で顕著になった与党内の分裂が指摘されている。また、米国滞在中のメキシコに関する話題で、最もマルティが目にした出来事だったと言える。

まず、1886年8月2日にメキシコのEPL紙宛にカッティング事件に関する記事を送ったのは、連邦議会下院にカッティングに関する文書が提出された段階だった<sup>31</sup>。一地方の小競り合いが外交問題に発展したタイミングで、両国関係のいびつさ、そして米国が暗に抱くメキシコ支配の野心を懸念し、「メキシコに関する案件について、米国でみられる無知と不正義に嫌悪感を抱き、かつ警鐘を鳴らす」と示す。マルティは、大統領に勝る力の存在を指摘する。「米国は、政府が国を動かしていない。重要でない案件を扱う政治家は放っておかれ、鍵を握るあらゆる案件に関わる政治家は跪かされる」。そして米国が一枚岩にならない現状をこう表現する。「精神は同じでも、外交には2つの流れが見られる。1つは政府とともにあり、紛争の可能性を前に、気品ある出口を探る義務的意志を常に抱く外交、2つ目は、大衆と共にあり、敬意と知識の欠如で大衆を破壊し、紛争を容易にしまし外交だ」(664)。そして具体的に、国境の米国側から発信される誇張された捏造記事

<sup>28</sup> 現在のシウダ・フアレス。

<sup>29</sup> 隣り合うメキシコと米国が国境線を巡って衝突するのは必然であった。二国間で領土のせめぎ合いが繰り返られていた19世紀に国際法は存在せず、国境を越えた犯罪の増加は、国家間紛争に発展し、刑事管轄権を統制している法と慣行の国際的側面についての議論を高めた(洪：1998)。

<sup>30</sup> 欧州で戦争が起こると米国の経済は栄える(664)と言い、戦争利権を指摘した。

<sup>31</sup> しかしながら、マルティによると、この記事を受け取ったマルティの親友マヌエル・A・メルカードは、内容がメキシコの外交政策にとって危険を及ぼしうることを理由に、EPLへ掲載させなかった(663)。

を受け売りする新聞各紙と、戦争に積極的ではなく、むしろ事態を鎮めようとしている連邦政府とを対比させる。連邦議会の内情についてはこう伝えている。

「産業が盛んで平静な東部は戦争を欲していない。南部はグランデ川を国境とすることに満足していないようだ。横暴で攻撃的な風土の西部は、未開の地で進めた征服を隣国でも続けるのに何の疑いもなかった。ともあれ議会で懸念すべきは、自己保身に走りかねない議員の判断である。議員たちの横柄さと無知が侵略への熱意につながらなければ、議員たちも問題を解決しうる」(666-667)。

こういった指摘は、『我らのアメリカ』で示される、無知への警告と通底する。これに引き続き、マルティはこの事件が外交問題にまで発展した7月1日以降の米墨の外交交渉の経緯を整理する。

- 7月1日、エルパソ・デルノルテの米国領事ブリンガムが在メキシコ全権代表ジャクソンに向けて、カッティングの解放に向けたメキシコ側の努力の欠如を指摘した。
- 6日、メキシコ外務大臣はジャクソンに、連邦政府はチワワ州知事に正義に基づく判断を早急に進めるよう伝えたと連絡する。
- 10日、電信でワシントンのバヤード国務長官はジャクソンに、メキシコ政府にカッティングの即時解放を求めるよう伝える。
- 20日、国務長官は再び電信でジャクソンに米国市民の自由を求める理由を詳細に示した。
- 22日、ジャクソンは米国の要求を斥けるメキシコ外務大臣の説明を伝える。

- 27日、バヤードが正式に抗議する。その抗議文には、マティアス・ロメーロ在米メキシコ代表がカッティングの早期解放を約束したとあった(667)。

その上でマルティは、メキシコ的外交姿勢を高く評価する。

「ワシントンでの一連の交渉下、ささやかだが紛れもなく輝きを放つのは、メキシコ外交の感嘆すべき態度だ。支配欲からくる気まぐれから大戦争と借金地獄にメキシコを引きずり込ませようとする真っ赤な火を吹く炭火の中を、彼らはくぐり抜けているのだから。つけ入る隙を与えない模範的なこの能力に敬意を示し、思いを馳せよ。屈しない才智、たおやかさ、この妙義は驚嘆かつ芸術にも値する」(667)。

その対極とばかりに、「でも、テキサスは？ ああ、テキサスでは…」と、テキサスの横暴ぶりを指弾する。

州の民主党大会は、「渴いた声で」国旗の栄誉を守れと大統領にカッティングの解放を求め、州知事は戦意を煽り、集まった志願兵はメキシコへの敵意を剥き出しにし、退役軍人の会は戦費調達に勤しみ、新聞はメキシコへの憎悪を煽る。そのまた対比が、慎重姿勢の連邦政府と大手新聞だ。40年前の米墨戦争を引き合いに出して戦争に疑問を呈するヘラルド紙の一節をマルティは評価した(667-668)。

次の、8月6日付の *La Nación* 紙宛のマルティの論調は落ち着きを取り戻す。8月5日に下院議会の意見が戦争回避の流れに変わり、事態打開の道筋が見えてきたからだ。そのきっかけとなったのが、アーサー政権下で国務次官補だったロバート・R・ヒット<sup>32</sup> 共和党議員の演

<sup>32</sup> Robert Roberts Hitt (1834~1906)。オハイオ州出身の共和党議員。ガーフィールド及びアーサー政権で国務次官補

説だった。マルティは記事の中でその様子を躍動的に描写する。

「『連邦議会は州管轄の裁判に介入することはできない』とヒットは一喝した。議員たちは驚いて顔を見合わせた。そして席を立ち、寄り合い始めた。ヒットは反論する者に耳を貸さなかった。ヒットの言葉は、党の精神からすれば国務長官を不信任にするべく民主党員の選択に冷淡に応えるはずのものだった。でもその率直な男の前に、戦争の雲は晴れたように見えた。そして議員の間にメキシコへの共感が生まれ、不正義がなされる一歩手前で修正が急がれた。大統領とロメロ・ルビオ内務大臣がメキシコの案件について示した明確な文書、そして真摯な謙虚さは、まだ熱を帯びたヒットの主張を決定的にした。恐れるでも挑発するでもない、すばらしい議論だったように思う」(682)。

元国務次官補の行動に、古き良き米国を見たのだろう。党利に捉われない信念が事態を打破しうる米国の懐の深さを、マルティは実直に賞賛する。しかし彼が最も評価するのは、メキシコの外交姿勢である。「脅すことも第三国に頼ることもなく、自尊心からくる敬意と、政府高官たちが示した正義によってこの危機をメキシコが制した」(682)と褒め称える。

一方で、3日後の8月9日に *La Nación* 紙に宛てた記事には、一連の騒動で党利を優先した民主党議員への落胆ぶりが窺える。

「大統領は党が国民に寄与するよう期待するが、民主党員はこれに抵抗する。なぜなら彼らは国民が党に貢献してほしいからだ。(中略)国内各地からグランデ川の

を務める。

国境に、泥棒やけんかっ早い人間が欲望の赴くままに集まった。対岸には、1848年の戦争の傷が記憶に新しい、古き良き街並み、手付かずの富、猛々しい民のいるメキシコが佇んでいる。彼らはこの土地に米国人住民が日々増えるのを嫌い、国境の向こうの住民たちが熱望する侵攻の恐怖と隣り合わせで、川向こうからの略奪や待ち伏せといった攻撃的な態度に対して直感的に拒絶する。(中略)エルパソとエルパソ・デルノルテ、あるいはラレドとヌエボ・ラレドなど、米墨国境に跨る町は互いに人の出入りが激しく、敵対している」(694-695)。

このような状況を前に、米国には一般的に莫大な富にそそられてメキシコ領有を企む志願兵が国境沿いに続々と集まってくるので、米墨関係を注意深く観察し続けるべきだ、と警告はするものの、両国の国際関係は概ね良好、というのがマルティの見方だ。ただし、国務長官はメキシコ政府に対してカッピングの身柄解放を要求し続けた。そのような状況で、冷静な現状分析をしてみせて議会とメディアの論調を変えたのは、共和党の一議員であった事実は書き洩さない。

3日後、8月12日のホンジュラスの *La República* 紙に宛てた記事でマルティは、イパノアメリカの団結を呼びかける。

「メキシコと米国が戦争勃発の重大な局面にある。今危機にある同胞は勘違いされている。野心に燃える不実で喧嘩好きな国境の烏合の衆が、奴らが渴望して止まない鉦山に恵まれたチワワ州に侵入する口実を作り出したのだ。我らのアメリカの心であるチワワが傷ついている。(中略)

我々の祖国は一つだ。グランデ川の南に始まって、山深いパタゴニアに終わる。現状に反して、メキシコがもし裕福な騒乱者に耳を貸してしまったら手痛い仕打ちを受けるだろう。騒乱者たちは今も中米の政治に介入する手立てを探しているような人間だ。自らの傷口から出る血をこねながら進むことを知り、国家形成時代の敵意と反抗、最も暴力的で尽きることのない嫌悪と、執拗で有害な遺産を巨大な領土の上に積み上げている国家、そんな一国に不平等な侵略を受けているのを見て、いたたまれない気持ちにならずにいられようか。(中略) 今回の騒動も口実にすぎない。メキシコが手放したテキサスと米墨戦争後に米国になった土地に住む米国人は戦争の魅力に取り憑かれている。そしてワシントンの国務長官はメキシコの刑法に反するかたちで、米国人の即時解放を求める判断をした。その男カッティングは国内と国外両方で名誉毀損の罪を犯し、チワワ州判事のかつての決定を蔑んだ輩だ」(682)。

カッティングがメキシコで迫害されているわけでもなく、むしろ彼が好奇心から米墨の戦争を煽ろうと拘束に応じたといった意図を米国側も把握して、事態は沈静化した。マルティは一貫してメキシコ的外交姿勢を評価し、イスマノアメリカの団結を呼びかけた。そして問題の根幹を見抜いた上で、米国内の報道ぶりを緻密に分析している。

8月19日付で、マルティは再び *EPL* 紙にカッティング事件の総括的な論評を送った。ここではバヤード国務長官の今回の失態に絡み、共和党のブレインが再び勢力を盛り返そうと、南部基盤の民主党が政権に就くといかに不必要な戦争が起きかねないかなどとあげつらい、

カッティング事件を政治利用しているとマルティは糾弾する。民主党のバヤード国務長官も、次期大統領選挙の候補人選びに有利になるよう、テキサス票を取り込む狙いだったというのがマルティの見方だ。さらに、この一連の騒動には根があり、その根とは、つまり「メキシコらしさである気品と勇気を米国が知らない」根であり、これを絶やさなければいけないと訴える(690-693)。

カッティング事件から約1年後、カッティングはNYを訪れた。1887年6月23日付の *EPL* 紙上で、「アメリカ併合リーグ(Liga de Anexión Americana)」という組織の会合の場に、大佐<sup>33</sup>の肩書きでカッティングが招かれ、カナダとメキシコを米国に併合しようとするその組織の操り人形よろしく振る舞う姿に厳しい眼差しを向けている。

一連のカッティング事件へのマルティの注目ぶりからわかることは、米国に屈することなく冷静に対応を続け、米国側の変化を呼び起こしたメキシコ的外交姿勢を高く評価していることだ。また、1886年時点でもマルティは、米国の領土拡張を真剣に心配し、大統領の意向より私利私欲を優先させる与党民主党議員らの政治倫理の欠如に危機感を覚えている。

## 結び

メキシコは、1824年憲法で自国の自由と独立を謳いながら、テキサス分離独立でも米墨戦争でも領土を守ることができなかった。その反省から、レフォルマ改革の末に大統領に選ばれた法律家ベニート・フアレスは、フランスが支援したマクシミリアン帝政時代に皇帝派の優勢で自らの大統領の地位が危ぶまれても、法を根拠に抵抗を続け、対外的な協力を取り付けた。法を尊ぶ伝統が、マルティの生きた時代のメキシコ外交にも顕著に見られたのであろう。マル

<sup>33</sup> coronel

ティは、メキシコの外交姿勢を手放しに評価するきらいがあった。特にカッティング事件へのメキシコの対応に関する記述にそれは明確に表れていた。マルティがメキシコ滞在中、ポルフィリオ・ディアスの軍事クーデターによってレルド・デ・テハーダ政権が打倒された時、マルティは、ディアスに否定的だった。しかし今回分析した記事では、個人名を挙げて評価することはないにしても、メキシコ政府、つまりディアス政権を非難する言及は見られない。マルティは、産業化、科学技術の発展に否定的ではない。米国との自由貿易を進めて米国資本を頼りに近代化を推し進めるメキシコの政策に異議はなかったであろう。その点では、イスマノアメリカの精神性を称賛してはいても、実証主義的な科学技術者を認める一面が見られる。マルティの祖国キューバも、米国資本による急速な近代化が、スペインからの独立の機運を高めたことは否めない。

米国の内政を分析し、共和、民主の二大政党の特性に通じるようになった1884～1885年頃からのマルティは、米国の南方外交の背後にある政治的意図を読み取り、メディアの報道ぶりも含めて分析し、イスマノアメリカ諸国の主権が蹂躪される危険を具体的に指摘するようになっていった。特にメキシコに関してマルティが最も敏感に反応した一件は、1886年6～8月にかけて展開したカッティング事件だった。真実や正義をないがしろにして、与党民主党の票田集めのために米国がメキシコに揺さぶりをかけたことに、憤りを露わにしている。1885年3月のアーサー政権からクリーヴランド政権への政権交代前後にますます舌鋒鋭く米国の対南方外交を批判するようになったが、カッティング事件の一連の米国の対応が、マルティの米国政治に対する不信感を決定的にし、『我らのアメリカ』論考に至る思想の土台のひとつとなったであろうことがうかがえた。同様にここ

で確認しておくべきは、クリーヴランド民主党政権への政権交代にあたり、非常に警戒していたマルティであったが、政権交代後、実際のクリーヴランドの政治手腕を知るにつれ、同大統領に対する評価は肯定的な方向へ変わっていき、大統領からの民主党議員の離反を指摘した点であろう。

## 【一次資料・分析対象】

- Martí, José, 2003, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA.
- 1883: “Cartas de Martí”, *La Nación* (1883/2/25), *ibid.*, #33, pp.231–236.
- 1885a: “Cartas de Martí”, *La Nación* (1885/1/15), *ibid.*, #75, pp.417–426.
- 1885b: “Sucesos de la quincena”, *La Nación* (1885/4/14), *ibid.*, #79, pp.460–463.
- 1885c: “Cartas de Martí”, *La Nación* (1885/7/6), *ibid.*, #86, pp.498–503.
- 1885d: “El general Grant”, *La Nación* (1885/8/3), *ibid.*, #88, pp.506–528.
- 1886a: “Correspondencia particular para El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1886/5/15), *ibid.*, #108, pp.600–608.
- 1886b: “Correspondencia particular para El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1886/6/18), *ibid.*, #115, pp.635–640.
- 1886c: “Correspondencia”, *El Partido Liberal* (1886/8/2), *ibid.*, #121, pp.663–669.
- 1886d: “Carta a La República”, *La República* (1886/7/8), *ibid.*, #122, pp.670–672.
- 1886e: “Carta de Nueva York”, *La República* (1886/8/12), *ibid.*, #125, pp.681–684.
- 1886f: “Correspondencia particular para El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1886/8/6), *ibid.*, #126, pp.685–689.
- 1886g: “Correspondencia particular para El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1886/8/19), *ibid.*, #127, pp.690–693.
- 1886h: “México y Estados Unidos”, *La Nación* (1886/8/9), *ibid.*, #128, pp.694–697.
- 1887: “México en Estados Unidos: Sucesos referentes a México”, *El Partido Liberal* (1887/6/23), *ibid.*, #157, pp.864–868.

## 【参考文献】

- Ameal P., Alberto, 2015, “Nicanor Bolet Pereza en *La Revista Ilustrada de Nueva York* (1885–1890).” *Camino Real* 7 (10), 77–91.
- Armendros, Herminio, 1965, *Nuestro Martí*, La Habana: Instituto Cubano del Libro. (神尾朱美訳、1996、『椰子より高く正義を掲げよ——ホセ・マルティの思想と生涯』海風書房。)
- Department of States., 1886, “No. 317. Mr. Bayard to Mr. Jackson.” Office of the Historian, Washington D.C. (Retrieved September 2, 2021, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1886/d321>).
- Díaz Q., Arcadio, 1997, “Martí; La guerra desde las nubes”, en José Martí., *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA, 2129–2148.
- Fernández Retamar, Roberto, 1992, “Nuestra AMÉRICA: cien años.” *Nueva Revista de Filología Hispánica*, 40 (2), El Colegio de México, 791–806.
- Foner, Eric., 1997, *The New American History*, Philadelphia: Temple University Press.
- Foner, Philip ed., 1977, *Our America: Writings on Latin America and the Strategy for Cuban Independence*, New York: Monthly Review Press.
- Gómez Q., Juan, and Antonio Ríos Bustamante, 1977, “La comunidad Mexicana al norte del Rio Bravo”, en David Maricel r. ed., *La Otra cara de México: El pueblo Chicano*, Mexico City: El Caballito, 24–73.

- Hardy, O., 1955, "Ulysses S. Grant, President of the Mexican Southern Railroad." *Pacific Historical Review*, 24 (2), 111–120.
- López, A. J., 2006, *José Martí and the Future of Cuban Nationalism*. Miami, FL: University Press of Florida.
- 2014, *José Martí: A revolutionary life*, Texas: University of Texas Press.
- Marciel, D. r. ed., 1977, *La Otra cara de México: El pueblo Chicano*, Mexico City: El Caballito.
- Márquez, Graciela, and Sergio Silva Castañeda, 2019, *Matías Romero and the Craft of Diplomacy: 1837–1898*, Mexico City: Instituto Matías Romero.
- Martí, J., 2003, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA/FCE.
- 1963–67 (1975 (2)), *Obras completas* (en 26 volúmenes), Editorial de Ciencias Sociales
- 2015, *Política de Nuestra América*, CDMX: Siglo XXI.
- Martín, Gail and Gerald Martín, 2003, "Los Estados Unidos en que vivió Martí", en José Martí., *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA, 1802–1847.
- Martínez, O. J., 1996, *U.S.–Mexico Borderlands*, Wilmington: Scholarly Resources Inc.
- Montero, O., 2004, *José Martí: An Introduction*, New York: Palgrave Macmillan.
- National Park Service., "Ulysses S. Grant, Matías Romero, and the Creation of the Mexican Southern Railroad", Ulysses S Grant National Park, (Retrieved September 15, 2021, <https://www.nps.gov/articles/000/ulysses-s-grant-mat%C3%ADas-romero-and-the-creation-of-the-mexican-southern-railroad.htm>)
- Pérez C., Hebert, 1990, "José Martí, historiador de los Estados Unidos, previsor de su desborde imperialista. El alerta a nuestra América," en José Martí., *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA/FCE, 2098–2108.
- Pérez, L. A., 1999, *On Becoming Cuban: Identity, Nationality, and Culture*, New York: The Ecco Press.
- Shnookal, D. and Milta Muñiz, 2007, *José Martí Reader: writings on the Americas*, New York: Ocean.
- Vázquez Pérez, M. ,2016, *De Surtidor y Forja: La Escritura de José Martí como Proceso Cultural*, Mexico City: Universidad Nacional Autónoma de México.

青木康征・柳沼孝一郎編、2005、『ホセ・マルティ選集Ⅱ—飛翔する思想』日本経済評論社。

生田保夫、1980、『アメリカ国民経済の生成と鉄道建設』泉文堂。

牛島信明編、1998、『ホセ・マルティ選集Ⅰ—交響する文学』日本経済評論社。

大垣貴志郎、2008、『物語 メキシコの歴史』中央公論新社。

神代修、1965、「ホセ・マルティの思想と行動」『人文學』(82), 同志社大学人文学: 90-107。

洪恵子、1998、「国際犯罪規制における引渡・訴追義務の変化」『上智法学論集』(41-3), 上智大学: 147-182。

後藤政子編、1999、『ホセ・マルティ選集Ⅲ—共生する革命』日本経済評論社。

高橋均、2021、「キューバと反米」遠藤泰生編『反米—共生の代償か、闘争の胎動か』東京大学出版会: 67-89。

竹村文彦、2014、「怪物の内臓を腑分けする——キューバの独立運動指導者ホセ・マルティの『反米』」『Odysseus』(19)、東京大学大学院総合文化研究科：87-111。

柳原孝敦、2007、『ラテンアメリカ主義のレトリック』エディマン。

池田大作・シンティオ・ビティエール、2001、『キューバの使徒 ホセ・マルティを語る』潮出版社。